

ボランティアの現状把握と活動継続のためのサポート体制作り

多摩市国際交流センター（TIC）小野 恵久子

1. 課題の背景及び実践の内容

（1）設定した課題の背景

多摩市国際交流センター（TIC）では、ボランティアの高齢化とともに恒常的なボランティア不足があり、また新人ボランティアの定着率もなかなか上がらないということが問題となっている。ボランティア養成講座も行って、ここ3年は継続して行っているが、それを上回る勢いで学習希望者が増えており、日本語学習支援活動が十分に行えない事態となっているため、新人ボランティアのサポートが急務であった。

（2）実践内容

まずTIC日本語ボランティアのアンケートで、現在のボランティアの経験年数ごとの分布を明らかにした。その後3年未満の新人18名の活動の見学やインタビュー、アンケート調査を実施した。その結果、新人は学習支援で悩みなどがあっても相談や話し合う相手がいなくて困難を抱えていることが明らかになった。

それを解決するため、不安な点について話し合い、解決の糸口が把握できるようにパイロットスタディを実施し、新人ボランティアをサポートすることにした。

2. 実践を通して「行ったこと」「考えたこと」「困難だったこと」

（1）行ったこと

来年度の新人ボランティアサポート体制を作るため、3回にわたって課題を見極めるパイロットスタディを実施した。内容はB1レベルの身近な話題から一部B2レベルの複雑なテキストの内容を読み解き、理解するためにはどうしたらいいのか、語彙や文法などにも触れながらワークショップ形式で話し合い、学習支援者の気づきを促すような方法で行った。5クラス全てから1年から2年の新人ボランティアの参加があり、延べ人数で14名の参加であった。

（2）考えたこと&困難だったこと

B1レベル（一部B2）になると、具体的なことだけではなく抽象的なことも入って来て理解が難しくなる。TICの日本語学習支援では、1対1、あるいは1対複数であるが、学習者に質問されたりして不明な点があり答えられないということもある。しかし、10回をみの養成講座では当然の面もある。ただ、難しい言葉を易しい言葉で言い変えたりする訓練をするだけでも、支援がかなり楽に行えることもあった。また、学習者と様々な話をする際に一往復のパターンで会話が終わってしまうことも多い。会話をする場合もトレーニングやスキルが必要だと考える。

現在の体制では、10回の養成講座を受けたあとにボランティアとして日本語支援に入っているが、それだけでは上記のようにとても難しい面もある。ボランティア開始後も活動継続のためのサポート体制を作らなければボランティアを続けること自体が困難になるのではと強く考える。

3. 実践を通じて地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割

今まではイベント以外での5つのクラスの交流というのは年に数度の研修会しかなかったが、今回は地域日本語教育コーディネーターとして動くことによって、同じ悩みを抱える新人同士の繋がりを作ることができた。また、学習支援者のB1レベルへの理解を深める内容の調査について、アンケート結果では概ね好評で

あった。ファシリテーターとしてパイロットスタディを行うことによって、新人ボランティア同士が他の人の考えを知り、自分自身の日本語支援活動の関わり方を内省し自分に何が必要なのかを感じ、考えるきっかけを作ったと思う。

4. 地域日本語教育コーディネーターとして大切にしたい視点と今後の展望

(1) 大切にしたい視点

TIC は 30 数年の歴史があり、まずは支えてきた先輩たちに敬意を払いながら事を進めたい。そのうえで、現在のボランティア不足の課題を第一として対処していきたい。なぜボランティアが定着しないのかをアンケートの結果なども含めて、事務局、現ボランティアと一緒に検討していきたい。そのうえで、大きく変化している国や行政の動きとその背景、目指す方向性を一緒に学び合っていきたい。

また、学ぶなかで気づいたことを整理し、私自身が地域日本語教育コーディネーターとして、今やれることは何かを考えて優先順位をつけていく。そして、TIC の組織内の様々な立場の人と連絡を取り合い理解し合いながら、計画、実行、振り返りのサイクルで、次のプランに繋げていきたい。

(2) 今後の展望

<短期的展望>

- ① 今年度の調査を踏まえて、来年度は新人ボランティアの人たちのフォローアップ体制を計画的に作り、TIC の年間計画に反映させていく。また、新人ボランティアと長く続けている方々が継続的に語り合えるような場も作っていききたい。これらは毎年行っているボランティア研修と関連づけることができるとあるので連携しながら考えていくこととする。
- ② 今年度、初めて多摩市によるゼロ初級対象の日本語教室が 10 回開かれた。この評価とともに来年度の日本語教室の保障などが引き続き求められるので、行政側とも話し合いを持ちながら外国人住民の日本語支援に努める。

<長期的展望>

- ① 事務局、日本語セミナー部や研修会議のメンバーなどと相談をしつつ、ボランティア全体で日本語教育の参照枠についての理解を深めるための学習会を持ち、地域日本語教育に求められていること、また、生活 Can do などについても共に学習していきたい。それに伴い、現在の TIC の体制で、できることはどのようなことか、そして何から始めるべきなのか、事務局、TIC のボランティア日本語教師の人たちが一緒になって語り合い考えていく場を作りたい。
- ② 現在、地域日本語教育に関する教材は Web で提供されていることが多い。しかし、TIC の場合ネットワーク環境がないクラスがほとんどなので、Wi-Fi などのネットワーク機器を使用することで補えるかどうかを予算面も含めて市当局また事務局や ICT に詳しい人材と一緒に考えていきたい。また、ボランティアの ICT スキルが追いついていない現状もあるので、Web 教材を使いたいと思っているボランティアのスキルを上げるような勉強会も企画したい。

5. 今回の発表で聴講者からもらいたいフィードバック

- ・地域日本語教育は地域によって位置付けや特色、取り組み内容もかなり違う。その違いを踏まえたうえで、今回の発表についての様々なアドバイスをいただいた。今回の調査をきっかけに色々な立場の方々とつながりを作り、多摩市の日本語教室をどう作っていくのか、TIC の目指すべき方向性についてもみんなで共有できるようにという温かいフィードバックをいただいた。みなさんの応援を胸に頑張りたい。